

氏 名：内 木 美 恵

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲 第 6 5 号

学位授与年月日：平成 2 8 年 3 月 1 8 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論 文 題 目：原発災害により長期避難生活をしている子どもを持つ母親の  
エンパワメントを促すアプローチ

THE APPROACH TO PROMOTE EMPOWERMENT OF  
MOTHERS WITH CHILDREN WHO WERE FORCED  
INTO LONG-TERM EVACUATION AFTER THE  
FUKUSHIMA NUCLEAR POWER PLANT ACCIDENT

論文審査委員：主査 谷 津 裕 子

副査 小 原 真理子（正研究指導教員）

副査 高 田 早 苗（副研究指導教員）

副査 佐々木 幾 美

副査 吉 田 みつ子

## 論 文 内 容 の 要 旨

### 【研究の動機と概要】

東日本大震災による東京電力福島第一原子力発電所の爆発により、周辺住民は避難を余儀なくされた。特に母親は育児に不安を持ち、それまでの生活基盤を失い、孤立した状態で避難生活を送っていた。各団体がこの惨状に対し支援活動に取り組んでいたが、長期避難生活をおくる母親の実態の研究は少なく、また支援に関する研究や長期避難生活を送る母親に関する研究は見当たらなかった。研究者は、発災 9 か月後から 1 年 2 か月の間、福島県において原発被災者の調査および支援に取り組んだ実績があった。そこで本研究では、自分だけで本来の力を取り戻すことが困難であるとみられる母親の支援プログラムを実施し、母親が本来持っている力をつけていくプロセスを探究したいと考えた。

### 【研究目的】

原発災害により、長期避難生活をしている子どもを持つ母親のエンパワメントを目的とする支援プログラムによる、母親の生きる力の変容のプロセスを明らかにする。

### 【研究方法】

本研究は、研究者が企画する支援プログラムに母親が参加するというアクションを通し、母親が本来持っている力をつけていく、エンパワメントのプロセスを明らかにすることをねらいとし、Stringer(2007/2012)のアクションリサーチの手法を採用した。

研究フィールドは、S 大学が M 町行政と契約を結び、O 市に避難した M 町町民を対象とした M 町健康支援事業において、O 市に設置した M 町の保健室を活用した。研究者の立場は、支援者、ファシリテーター、助産師、仲間であり、場の様相に応じ使い分けた。研究協力者として、M 保

健室の看護師、保健師、栄養士の3名を確保した。

支援プログラムは Kiefer(2006/2010)の理論に準拠し企画、たんぽぽサロンと母親よろず相談で構成した。サロンの特徴は母親が自由に交流でき、徐々に母親が主体的に行うことを目指した。開催は月に2回、2時間程度とした。母親よろず相談は母親が気になることを相談し、研究者は助産師として助言することを意図した。研究参加者は、O市に避難しているM町の子どもを持つ母親12人、子どもは就学前の19名であった。データ収集期間は、予備研究を含め2013年11月から2015年7月の1年8か月間(予備調査は2013年11月～2014年4月)であった。

データ収集は、主に参与観察であるが、インタビューも行った。データ分析は、Emerson, Fretz & Shaw の理論を活用し、実践現場に参与しながら観察したことを、系統的にフィールドノートに書き留め、さらに研究者が感じた事柄を欄外に書き込み、言葉や行動、雰囲気等の意味を考え解釈した。解釈の妥当性を吟味するために、研究参加者にインタビューを実施した。またデータの分析過程では適宜、災害看護の専門家にスーパービジョンを受けて、妥当性の確保に努めていた。

### 【倫理的配慮】

予備調査(承認番号 2013-74)、本調査(承認番号 2014-96)ともに本学の倫理審査委員会の承認を得た。また研究参加者との信頼関係を重視し、説明と同意を得た。

### 【結果】

#### A. 支援プログラムの実施状況及び研究参加者の概要

サロンは1年5か月の間に33回、開催時間は10時～12時頃、ほぼ計画通りに実施した。サロン各回の参加人数は母親が2～10名、子どもは2～12名であった。2時間の中、前半の1時間で母子の触れあいとして歌や軽い体操等を実施、後半の約1時間は母親と子どもの部屋に分かれ、子どもは看護師等のスタッフと遊び、母親とファシリテーターである研究者は茶話会を行った。茶話会でのプログラム内容は母親の要望を取り入れつつ変更していった。5回目頃よりサロンの仲間との外出、また季節の行事を企画し、遊びや工作等を母親達と共に考えた。

母親よろず相談は、電話による健康に関する相談内容が主であった。6回目のサロンより、待ち時間や終了後の帰り支度中の15分程度、子どもや自分の健康、生活での出来事を話しかけ、自然によろず相談となった。

#### B. 母親達のエンパワメントのプロセス

母親達は33回の支援プログラムであるサロンとよろず相談に参加することで、エンパワメントは促され、母親達のコミュニテイレベル、個人や対人関係レベルの変化がみられ、その変化は4つのフェーズに分かれた。

**第1フェーズ**は、母親達はファシリテーターとの関係を作り、避難の体験を打ち明ける段階であった。**第2フェーズ**は、家庭での出来事を共有し、母親同士のつながりが生まれる段階であり、母親自ら他の母親との関わりを持ち始めた。また自分の育児行動を見直す様子が見られた。**第3フェーズ**は、仲間意識を持ち、身近な社会に関心を広げる段階で、家庭以外のことに関心が広がり始めた。自分の健康、新たな生命が授かる、子どもの成長を喜ぶ、放射線に対応をしながら、この地で暮らすことであった。**第4フェーズ**は、自然に自分の関心事を語り、サロンの存続を求める段階であった。母親達は心の奥にある悩みを語り、助言を求める、避難先で新生活を始める

決意と揺らぎが見られた。茶話会の運営を自主的に始め、新しい参加者を迎えた。

### **C. 支援プログラムに対する母親の思い**

母親達は、支援プログラムについてどのような思いがあったのか、一人一人の母親に注目し、サロンでの反応や態度をみると、共通点が見られた。支援プログラムは、自由に話ができて、リラックスできる、そして子どもが楽しみ、安心して避難者であることを語れる場であった等があげられた。

### **【考察】**

#### **A. 原発災害で避難を強いられた母親が抱えていた苦難**

サロンでの会話から、母親達は原発災害と避難先を変更させる生活から心の傷を負っていることが明らかになった。避難の過程で、避難先の住民の避難者に対する否定的な反応から、無意識のうちに批判され偏見の目で見られているという烙印を自分自身に捺し、スティグマを意識していた。避難先の〇市でも友人がおらず孤立しており、母親の心の傷は続き、深くなり、癒されることはなかった。

#### **B. 母親達のエンパワメントの変化と支援プログラムの検討**

支援プログラムに参加することで、エンパワメントは促され、そのプロセスにおける4つのフェーズには特徴があった。

**第1フェーズ**は、ファシリテーターとの関係を作り、サロンの参加者に同じ思いの人たちがいることを知った。そして避難の体験を打ち明け、共有できる環境に心地良さを感じ、自分が尊重されていることを体験して、自尊感情が湧き、力を取り戻す基盤が作られた。

**第2フェーズ**は、第1フェーズの受動的な姿勢から能動的な姿勢に変化し、母親同士がうち溶け、信頼関係が芽生え、自尊心や自分らしく生きる権利を取り戻しつつ、サロンをきっかけとした新たなネットワークができた。

**第3フェーズ**は、仕事や友達づくり、趣味等を話題に、関心の広がりが見られ、余裕を持って子どもに接し、お互いに子どもの成長や新たな生命を授かり、将来への希望を持った。これまでの苦痛が癒され、心の傷からの回復が進みつつあることが考えられた。

**第4フェーズ**では、母親達は心の奥にある悩みを語り、この悩みに真摯に応え、親密性が深まり、信頼関係が確かなものになった。原発避難者が抱える社会的課題に目を向け、社会的な面からもエンパワメントが広がった。そして避難先に居住することを決定する等、母親達の価値観の変化と捉えることができた。

本支援プログラムは母親のエンパワメントを促し、心の傷をケアするという効果を実証できた。母親のエンパワメントに影響を与えた要素として、子どもの成長の関わり、母親同士の共感や学び、相談から生じた相互作用があった。また支援者は母親の状況に関する情報を分析し、会話や行動から心の奥に感じていることを熟考して支援の必要性を判断し、支援プログラムを作成することが必要だった。支援者は、母親の避難体験の辛い語りには敬意を払い、ありのままを受けとめ、共感しつつ、母親のニーズを満たすように接する必要があると、支援者の心のケアも合わせて重要であった。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、原発で被災し傷ついた子育て中の母親の力を取り戻すために、研究者が行う支援プログラムによるアクションリサーチを取り入れ、研究参加者である母親達のエンパワメントのプロセスを明らかにする実践的な研究である。支援プログラムが母親のエンパワメントを促し、心の傷をケアする点で効果があったことが確認できた。研究方法として支援プログラムの実施をアクションとし、母親の反応を見ながら場面場面でそのアクションを変容させた実践力の高さと、また母親達のエンパワメントのプロセスの変容を Kiefer の理論で裏づけ考察した点は、本研究のオリジナリティである。さらに支援プログラムを展開するに当たり、母親達に寄り添いながら心理状態を深く理解し、支援者としてのあり方に言及していることも、母親達エンパワメントの変容に関与していると評価する。

研究者は準備も含めフィールドに通算 2 年近く通い、そして 33 回に亘るサロンを主とする支援プログラムを開催、各回ごとに研究者はサロンに研究者としてだけでなく、ファシリテーターとして、時に助産師として参加しながら、母親同士の会話や研究者との対話の様相を克明に生き生きとした場面として描写した点が本論文のユニークな点であり、さらに描いた様相を慎重に解釈・分析し意味づけたことは評価できる。

先行研究では、長期避難生活をおくる母親の実態の研究は少なく、また支援に関する研究や原発事故被害による長期避難生活を送る母親に関する研究は見当たらない現状から、大変に意義深い研究論文である。さらに被災し子育て中の母親の支援に関する研究のみならず、種々の被災者に対する支援プログラムを作成する上で参考となり、災害看護学の研究としての意義がある。

本博士学位論文審査会では、学位規程第 3 条により、審査の結果、博士（看護学）の学位論文のとして「合格」と判定した。その後、最終試験を行い、「合格」と認めた。